
蒼い空の果てに《銀魂・沖神》 挿絵つき

朝露詩奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼い空の果てに《銀魂・沖神》 挿絵つき

【Nコード】

N9729Q

【作者名】

朝露詩奈

【あらすじ】

4年後のお話。

2人が付き合い始めて3年、総悟が神楽の誕生日に、いきなりプロポーズする。神楽は戸惑いつつも了承し…。

やがて総悟の笑顔の裏に隠された秘密を神楽は知り、彼女を残酷な運命が待ち受ける。それでも神楽は果敢に運命に立ち向かい、1人で少しずつ立ち直っていく。死ネタなので注意。

Scene 1・A glow of the setting sun and

注意！！

初投稿の駄文です。

沖神CPです。キャラ崩壊しています。

死ネタです。最後はハッピーエンド（？）にしますが。

若干BLRECHもパクっています。

上記が苦手な方はバック推奨します。

また、ページ下部にヘタすぎる挿絵があります。

この「ヘタすぎる」というのは謙遜ではなく、本当なんです。（じやあなんで載せるんだよw）

ですから、顔面崩壊してしまった沖神を見たくない方は、挿絵表示をオフにご覧ください。

Scene 1・A glow of the setting sun and

11月3日。

その日は、神楽の18歳の誕生日だった。

付き合い始めて3年の彼氏——総悟と一緒に、彼女は夕暮れの河原を散歩していた。穏やかな時間がゆっくり流れ、寄り添う2人の長い影がアスファルトの地面に落ちていた。

「もうこんな時間アルかぁ。見てヨ、夕日がとっても綺麗ネ」

「ああ…そうだな」

総悟はそれを、まるで別世界の出来事であるかのように、ぼんやりと眺めている。

3

「ところで…神楽」

「何ネ？」

日傘をくるくると回し、神楽はすっかりご機嫌な様子。

「…っ、こつち来いっ！！」

総悟は神楽のうでを引っつかみ、人気の無い小さな林の中へ連れ込んだ。その衝撃で神楽の手からは日傘がコトンと落ちたが、総悟は気にしない。

「神楽…」

「待つて…っ、ちよっ、何する…アルかっ!!」

近くに生えていた木の幹に無理やり押し付けられ、神楽はじたばたする。

「あっ、悪イ…」

総悟は慌てて手を離れた。そして、こういう事は初めてだから緊張して…などと、言い訳じみた言葉をぶつぶつ呟いた後、神楽に向き直った。

「あんな、神楽…」

彼は視線をあちこちにやりながら、慣れない言葉を紡ぎ出そうと必死に葛藤している。一方で神楽は、何を勘違いしているのか、すぐに逃げられるようにと身構えをしていた。

「神楽…」

赤茶色の瞳が、群青色の澄んだ瞳を捉えた。いつもとは違う空気の流れに、神楽は戸惑いの色を見せた。そんな彼女に口元を緩ませ、総悟は心の内に留めておいた一言を囁いた。

「俺と、結婚してくれ」

「…はあ？」

少し間が開き、神楽はようやく総悟の言っている事を理解した。

「えっ…あ、あの…っ…」

あまりに突然の事なので、神楽は言葉が出ない。総悟は、それを少し可笑しそうに微笑^{わら}って見つめている。

「私…っ、その…」

神楽は、下唇を噛んだ。

「……無理っ！！」

総悟の微笑みが、硬直した。

「え？」

「だって…私、まだ18…総悟のお嫁さんなんて、務まらない、ヨ…」

神楽は声を絞り出す。

「それに…銀ちゃんも、新八も、アネゴも…そもそも、お前のところのゴリやマヨ…」

「周りの人の事は、今は関係ねエ。お前がいいのか、嫌なのかって問題でさア」

総悟の顔からさっきの硬直は消え、穏やかな目で神楽を見ていた。神楽は一瞬だけ目を見開き、それから俯いた。

「そっ、総悟が、どうしてもって言うなら…断ったら、お前もメンツが立たないだろうし…結婚してやっても、いいアルよ？べ、別に私はどうでもいいネ…ただ、お前が、頼むから…」

必死に強がつてはいるが、語尾は消え入りそうになっている。心なしか、頬も赤い。それを総悟は、目ざとく見つけて指摘した。

「神楽、顔、赤いぜイ」

「っー!!」

神楽は両手で頬を押さえた。

「夕日のせいアル!」

「へーえ、そうかい?」

「そそそっ、そうアル!あっ、そういえば!まだ何も貰ってないネ、誕生日プレゼント、くれヨ!」

すでに真っ赤になっている彼女は、それでも何とか誤魔化そうと話題を変えた。

「∴このプロポーズがプレゼントだと言ったら、ブツ殺すネ!私、そういうキザ男、大嫌いアル!」

プロポーズをプレゼントだと言っつもりだった、どこかのキザ男は、視線をすつと逸らせた。

2人を包む夕焼け空を、乱鴉がうるさく翔け抜けた。

> i 2 7 7 5 0 — 3 5 9 8 <

Scene 1 : A glow of the setting sun a

えー読んでいただき、ありがとうございます。

これからも頑張って書きますので、生温かい目で見守ってやってください。

初なので、できたら評価もお願いします；

Scene 2・A puzzlement and an anxiety

突然のプロポーズが神楽を驚かせたことは確かだが、さらに神楽を驚かせた事がある。

あの後万事屋に戻って、総悟と結婚することが決まった事を銀時や新八に話していた時である。

2人の驚愕の声が響く中、電話がかかってきた。電話の主は、神楽の予想通り総悟だった。

「どうしたアルか？」

「お前、明後日は時間あるか？」

「え？…あるけど…」

「じゃ、結婚式明後日にするから」

受話器の向こうの総悟の声は、いつもと同じで、素っ気ない。何を考えているのか、神楽には皆目見当が付かなかった。

「明後日って、冗談じゃないアル！！こっちは準備も何もできてないし、そもそも式場の方が…」

「もう、予約してありますア。綺麗なチャペル」

「で、でも、服…」

「真っ白のウェディングドレス、注文してあるぜイ」

「お金！」

「もう積立てた」

「指輪は？」

「お前が気に入りそうなのを、特注で作ってもらった」

「えっと…婚姻届」

「明日、一緒に出しに行こうかと」

「家とかは」

「お前さえ気に入れば、いつでも買える状態だぜイ。万事屋と真選組との中間地点くらいの物件でさア」

「……」

神楽の身の回りで、事は猛スピードで進んでいく。その速さに、神楽はついて行けない。

「せめて、もう少しこっちの準備が出来てから…」

神楽がもつともな意見を言う。すると、総悟の困ったような声が聞こえてきた。

「それは…その」

「総悟…。お前、何か、」

——何か隠してるアルか？

そう訊こうと思った。

でも、なぜか言えなかった。代わりに口から出てきた言葉は、

「あの…ありがとう」

「良かった。じゃあな」

電話が切れた。

神楽も受話器をカチャリと置いた。

心に妙なわだかまりを抱えたまま、これで良かったのだ、もともと総悟には強情なところがあるから…と自身に言い聞かせた。

そして、努めて明るい顔を作り、2人の方を振り返った。

「銀ちゃん、新八。結婚式、明後日になったネ」

「え???えええー!!!!!!」

新八が、もはや人間のものとは思えない、獣じみた叫びを上げた。
「オイオイ新ハイ、落ちつけよコノヤロー。そんな事あるわけないだロツテンマイヤーさん!」

言いながら銀時は、鼻の穴に食べかけのパフェを突っ込んでいる。

「いや、アンタが落ちつけエエエ!」

新八のツツコミが炸裂したところで、2人とも静かになった。

「どういうことだ?神楽」

「だから、結婚式は明後日ってことネ。式場も、ドレスも、みんな用意してあるって…。婚姻届は、明日出しに行くアル」

神楽は、躊躇いつつも一連の出来事を話した。

銀時は終始黙っていた。そして、おもむろに神楽を見た。

「駄目だ」

「何でアルか？」

「決まってるだろ、んなもん。十分に準備も済んでねエ状態で…。一生に1度の思い出だ、お前だって最高のものにしたいんじゃないの？俺だって、お前にはいい思い、させてやりてエしよ」

銀時は、いつもの死んだ魚のような目に若干光を宿らせ、神楽に言い聞かせた。

こういう場合、普段なら素直に受け入れてしまう神楽だが、今回はやはりそんな訳には行かなかった。総悟の、あの真剣な…何か思い詰めているような声が、どうしても頭に響くのだ。

「私…きつと総悟も、何か理由があるんだと思うアル…」

「いや、単に早まってるだけだろ」

銀時は興味なさそうに鼻をほじった。

「総悟の事、私が一番よく知っているネ！だから銀ちゃん…お願い

…」

「……」

銀時はバツが悪そうに頭をカシカシと掻いただけだった。

「でも、ちよつと銀さん！考え直しましょうよ！神楽ちゃんも！そもそも沖田さんだって、そんなに急が——」

「もういい、新八。神楽が決めた事だ、これでいい。…さあ、知り合いに連絡するぞ」

「あ…ハイ」

新八が眼鏡を押し上げ、電話帳を棚から引つ張り出す。銀時は電話機片手にスタンバイ。

神楽の心に、温かな物が広がっていった。それは、家族にも似た、優しいもの…。

神楽の顔に、自然に笑みが浮かんだ。

>
i
2
7
8
0
8
|
3
6
0
6
<

Scene 2 . A puzzle ment and an anxiety

とりあえず書きました。

読んでやってください（笑）

Scene 2・A puzzle ment and an anxiety

翌日、神楽は軽い足取りで真選組の屯所へと向かった。勝手にずかずかと上がり込むと、出てきたのは土方。

「おいマヨおー、総悟、いるアルかあ？」

「ん？ああ…。おーい色男、客だぞー」

土方が奥に向かって呼ぶと、総悟がすぐに出てきた。

「届出、出しに行こうヨ」

「そうだな。待ってろ、用紙を持って来る」

総悟は再び奥に引っ込んだ。その後ろ姿を見送りながら、土方がぼつりと言った。

「4年前…か。お前がウチの総悟に初めて会ったのは」

「そうアルな…」

「あの頃は、会う度に喧嘩ばかりするから、お前らが顔合わすたびに、屯所が破壊されるんじゃないかと本気で心配してたぞ」

「まあ…でも、それはそれでいい思い出アル」

「ああ。あの頃は、まさかお前らが結婚するなんて思ってもいなかっただな。お互い、大人になったんだな」

「そうアルか？私、別に変わってないヨ」

神楽はぴょんととび跳ねた。そのあまりに無邪気な様子に、土方は苦笑した。

「そつえば、マヨは…結婚、しないアルか？」

「あ？俺か？」

土方は空を見上げた。

「俺は…」

その先は言わず、ポケットから煙草とライターを取り出した。1度大きく煙を吸って、ふうつと吐き出す。

「待ってる人が、いるからな」

「……」

土方が見上げる空には、ミツバの面影が映っているのだろうか。
神楽もまた同じ空を見上げた。

秋晴れの空はどこまでも高く、高く澄んでいた。
その時、

「神楽、待たせたな。行こうぜ」

しばしの沈黙を、総悟の底抜けに明るい声突き破った。

「あ…あはは」

神楽は総悟に駆け寄り、少しでも土方をすまなさそうに見た。

土方は、行ってこい、と言うようにあごをしゃくった。

「あれ、土方さん。どうかしたんですかイ？」

「別に何も。ただ、この空が気持ちいいなーってな」

その台詞が、万年仏頂面の土方にあまり似合っていなかったので、
2人は吹き出した。

「馬鹿…さつさと行け！」

「へいへい。ここにいると殺されそうだし、行くか」

「そうアルな。じゃあマヨ、そこで勝手に空を見上げてカッコつけてるヨロシ」

神楽はお得意の毒舌を吐き、総悟と腕を絡ませて楽しそうに屯所を出た。土方はその様子を、ただじつと見ていた。

「すまねエな…総悟…」

彼のその小さな声は、2人には届かなかった。

Scene 2 · A puzzle and an anxiety

えーと・・・

ぐだぐだです、既に。
読みにくいし。

でも、

まだまだ続きそうですorz

S c e n e 2 . A p u z z l e m e n t a n d a n a n x i e t y

時間が少し飛んでいますが、婚姻届を出しに行った後の話です。

Scene 2 . A puzzle ment and an anxiety

「あーっ、緊張したーっ」

役所から出てすぐ、神楽は息を大きく吐いた。まるでそれまで呼吸をしていなかったかのようだ。

「まったく、緊張にも程がありまさア。ずーっと無言で、お前らしくないったらねエ」

総悟はやや呆れ気味に神楽を見る。

「だって、何か…この女、総悟には似合わないとか思われてたら…」

「はあ？何言つてやがんでイ。俺が選んだんだ、お前を。似合わないはずがねエだろ」

総悟は時々、表情を全く変えることなく、こういった具合の思わず赤面しそうな言葉を平気で言う。神楽はぽんぽんと頬を叩き、熱を冷ました。

「じゃあ、明日。駅前のチャペル、あるだろ。あそこで9時から」
「うん」

神楽はいったん頷いてから、そのまま首を横に振った。

「式の段取り、どうなってるアルか！私、まだ聞いてないヨ」

神楽がいきなり大きく声を上げるので、道行く人が2人を見る。

総悟は唇に指を当てて、静かにするようにと促した。神楽はハッとしたように口を押さえた。

「段取りって…そんなもん、決めてねエよ」

「はあ!？」

「もともと、大勢の人を呼ぶつもりはなかったんだ。だから、旦那とお前んとこのメガネと、殺人料理人…あ、いや、メガネの姉と、それから1階のスナックの…」

「お登勢さんと猫耳女」

「そうそう。それと、近藤さん、土方死ねあの野郎と、ザキだな」
「うーん…」

人数的に少ないような気がしたが、よく考えてみれば知り合いなんてそれくらいしかないのだからいいか、と神楽は勝手に納得した。

「うん、楽しみにしてるヨ！」

「ああ。そうかしこまることもねえし、リラックスすりゃいいだろ」
総悟は神楽の肩を軽く叩いて、

「じゃあな」

そう言って、早々に帰ってしまった。

「あ、じゃあ、また明日」

神楽も慌てて答えたが、不服そうに頬を膨らました。

万事屋まで送って行ってくれてもいいのに…と思ったのだ。

でも、総悟もきつといういろいろ準備があるんだろうなと思って、
1
人でにやりと笑った。

Scene 2 . A puzzle ment and an anxiety

微妙な終わり方をしましたが；

この先はどうなる事やら・・・。
作者も分らないです（笑）

S c e n e 3 . A s n o w w h i t e d r e s s a n d a c r i

いよいよ結婚式です!!

総悟君の思惑はまだ分らず・・・。

晴天のもと、鐘が1度、厳かに鳴った。

それが開始の合図だった。

少人数のチャペルの中、真っ白なタキシードに身を包み、総悟はやや固まりながら神楽を待った。

「それでは、うおっほんっ、新婦の入場ですー!!」

司会を務める近藤がマイクを握り、ゴリラらしい咳払いを1つした後、むさ苦しい声で言った。

メンデルズゾーンの結婚行進曲が、パイプオルガンの連弾で演奏される。なお、演奏しているのは、どこから侵入したのか、桂とエリザベス。幸い真選組の面々は桂がいることには気づいていない。

チャペルの扉が、軋みながら少しずつ開いていった。一瞬だけ、まばゆい光が室内を覆った。

純白のドレスをまとった神楽が銀時と腕を組みながら、バージンロードをゆっくりと歩く。もちろん、厳密に言うとな銀時は父親ではないのだが、急すぎる結婚式に星海坊主が間に合わなかったのだ。神楽は「銀ちゃんでもいいヨ」と快諾したが、心の底では父親と歩きたかったのだらうな…と、銀時は複雑な思いだった。

それでも、これまで4年の歳月を共にしてきた、家族と同じくらい大切な人。

銀時は晴れがましい思いで歩いていた。

一方の神楽には、たった数十メートルでしかないその道のりが、途方もなく長く感じられた。

それでもだんだん総悟との距離は縮まっていき、あと3歩…2歩…1歩…。

気付いたら、すぐ近くに総悟がいた。

銀時はふっと笑い、総悟に神楽を受け渡した。

「では…新郎、沖田総悟さん。貴方はこの女性を妻とし、一生愛す

ることを誓いますか？」

髭の長い、優しい神父が静かな声で尋ねた。

「誓います」

総悟が、どこか誇らしげに答える。

神父が、神楽の方に向き直った。

「神楽さん。貴女は沖田総悟さんを夫とし、一生愛することを誓いますか？」

予想していた事なのに、神楽はなぜか慌ててしまって、

「誓うア……ます」

ついついいつもの口癖が顔を見せ、張りつめた雰囲気の会場に和やかな空気が流れた。

神父も少し笑って、

「指輪を交換してください」

総悟は神楽の手を、壊れ物でも扱うかのようにそつと取って、その指に綺麗なダイヤモンドの指輪をはめた。指輪は神楽の指にぴったりで、とても似合っていた。神楽も、先ほど総悟から手渡された指輪を、彼の指にはめた。

「よろしい。それでは、新郎は新婦のベールを上げてください。……誓いのキスを——」

会場中が、しーんとなった。

神楽のあごに、手がかけられた。自然に顔は上を向く。

そして、どちらからともなく目を瞑り、唇が触れた。

この瞬間が、まるで永遠のように、神楽には感じられた。

時間の感覚なんて、無い。手足の感覚も、無い。ただ2人だけの世界を、ふわりふわりと彷徨っていた。

優しいキスの余韻から戻って2人が顔を上げると、会場が割れるような歓声に包まれた。

2人は頬を同じ色に染め、会場を見回した。

銀時とその妻の妙、そして新八ら万事屋一行は大きく拍手をしている。キャサリンはなぜか煙草をふかして、隣に座るお登勢に叩かれ

ていた。

それから真選組一行――近藤はマイクを握り締めた状態で、鼻水を垂らしながら泣いている。土方は静かに男泣き、山崎も肩を震わせている。

「おい、お前んとこの連中、意外と泣くアルね」

神楽は面白がって小声で総悟に言ったが、その総悟も泣きそうな顔をしているので、かなり驚いた。

「こつ、これは、何でもないゼイ？ああ…か、乾燥してんな、ここ
の空気！やっぱもうすぐ、冬だなあ！！ちくしょう、目が乾燥して
痛いじゃねエか…」

「無理するなヨ、分かってるネ」

神楽はにやりとした。

「それにしても…とても素敵な思い出になったネ。よく予約取れた
アルな」

「だってもう、1か月前から予約しておいたから」

総悟は当たり前といった顔で答えた。

「ちょ、ちょっと待てヨ！！じゃあ私が断ったら、どうするつもり
だったアルか！」

「ん？考えてなかったな、んなもん」

「はああ??」

「お前が断るわけねエと思ってたからな」

「総悟…お前馬鹿ダロ」

ロマンチックさとはバスケットボール1個分外れた会話をしている
中で、近藤の声が飛んできた。

「皆様、新郎と新婦に、今一度大きな拍手を！！拍手で彼らをお見
送りくださいーっ！！」

こうして、結婚式は皆の心に幸福感を残した中に閉幕した。

S c e n e 3 . A s n o w w h i t e d r e s s a n d a c r i

何とか、できました。

結婚式の段取りとか分からなくて、これでいいのかどうか；

キャラが素晴らしいほど崩壊しております・・・。

S c e n e 3 . A s n o w w h i t e d r e s s a n d a c r i

銀さんが何気にイイ人になってます。

多分。

Scene 3・A snow white dress and a cri

2人が手をつなぎながら会場を後にし、ホールに出ると、数分後に招待客たちもぞろぞろとやってきた。

「えー、神楽。あー、結婚、おめでとう」

銀時は何度も詰まりながら、ちよつとムスツとしたような表情で言った。

「旦那ア、もうすっかり父親顔じゃねエですかイ」

総悟がからかう。すると銀時も少しだけSの貌を見せ、

「新郎は黙っているように」

「そんなの、無しでさア!!」

叫ぶ総悟を、銀時は軽く無視する。

「というわけで、これから2人の夫婦生活を応援するものを、みんなで1つずつ買ったわけですよ、うん。ではまず新八」

「ハイ。えっと、おめでとうございます!!幸せになってください
ね」

新八が手渡したのは、家内安全と絶対安産のお守り。

「あんまりお金無くて…。でも、気持ちだけでも、受け取ってもら

えたら…」

「新ハイ、安産の方は気が早すぎアルよ！まあ…でも、嬉しいネ。ありがとう」

「次は、妙」

「神楽ちゃん、総悟くん、おめでとう。私からは、2人が毎日元気で生活できるように、栄養満点の卵焼きを——」

「ちよつと姉上エエエ！！」

「——と思ったのだけれど、やっぱり物がいいわよね。はい、ベビ服」

まさかダークマターをいただくことになるのでは…と息をのんでいた2人は、ほつと肩の力を抜く。

「アネゴも気が早いアルな…」

神楽はそう言いつつも、やはり嬉しそう。一方で総悟は、

「ああ、まったくでさア」

と、何だか複雑そうな顔でそれを見ている。

「どうしたネ、総悟」

「ん？何でもねえ、何でも」

総悟は、取り繕うように視線を外した。

やっぱり、何かを隠している。

神楽はそう感じ取ったが、何も言わないでおいた。いや、言えなかったという表現の方が的確かもしれない。そう……一昨日、電話を受けた時のように。

「オイ神楽、おかしいぞお前」

すっかり黙ってしまった神楽に、銀時が声をかける。

「そんなに欲しかったのか、妙のダークマ……っ、卵焼きが」

「うつん、いらな…あの、えっと、今度でいいアル」

神楽は適当に誤魔化した。が…

「今度と言わず、明日でもいいわよ？神楽ちゃんのためなら、いつでも作ってあげるわ」

そう言うにこやかな妙の笑顔が、どこかしら恐ろしい。

「あ…あの…あはは、ありがとうアル、アネゴ！」

「おお良かったな、神楽。はいじゃあ次は…大串君」

「誰が大串だコノヤローっ！！土方だボケエエエ！！」

こんな具合で、総悟と神楽の手元には、次々と贈り物の山が積み上げられていく。

土方からはマヨネーズ1年分のクーポン券。これで総悟に上手い飯を作ってやってくれと、彼は神楽に手渡した。

近藤からは写真立て。2人の思い出を、一生の物にして欲しいという気持ちからだそうだ。

山崎からはミントンのラケット。仲良くスポーツをしてくださいなと言っていた。

お登勢からはお揃いのマグカップ。それを持って、いつでも店に来なよと招待した。

そしてキャサリンからはローション……。

「んなもんいらんわアア!!!!」

と、これは総悟と神楽のシンクロ率100%のツッコミ。

「おい猫耳！私たちをからかつてるアルか、あん？答えるやコルア」
「そーだぜ、んなものなくても、俺は十分こいつにあんあん言わせ
れ——」

「サド、離婚したいかテメー」

「最後は、俺のだな」

銀時は自信満々に咳払いをして、2人の前に立った。

「えー神楽。そして総悟君。思えば3年前、お前らが付き合つと聞いた時は驚いた。すぐ別れるんじゃないかと心配もした。…でもな、今日結婚式で思ったよ。やっぱりお前らは、お互いがいないと駄目なんだなつて。お互いに支え合つてるんだなつて。これから先、どんなことがあるか分からねエ。でも…晴れの日も雨の日も、元気な時も病める時も…いつも2人で仲良く生活し、励まし合い、やがて訪れるであろう死の瞬間まで一緒にいる。…総悟君、もう神楽は俺のもとから去つていくようなもんだ。コイツは、一見気が強そうだが、けっこう寂しがり屋なところがあるから、よろしく頼む。神楽、総悟君の事を信頼しろ。俺が言うのもなんだが、結局のところコイツはなかなかしっかりしているし、時を重ねれば重ねるほど、お前の最高のパートナーとなるだろう。互いを想い合う気持ちを忘れるな。……俺からは、以上だ」

銀時は一步下がった。

「それだけなのか、万事屋」
土方が訊いた。

「それだけだ」

その言葉にブーイングの嵐が巻き起こり、皆が文句を口々に言う。

ふざけんな、金を使わないセコい作戦取りやがって！ケチ！金欠男！！カッコつけんな！！

しかし、神楽には銀時からの言葉が、一番心に染みた。

総悟も同じ気持ちだったのだろう、神楽の肩を抱き寄せて、銀時に向かって大きく頷いた。

「それじゃあ改めまして、お二方、おめでとunggざいます！！」

銀時が声を張り上げた。

わあっと、再び歓声が起ころうとしたその時。

天井から何か落ちてきた。

「…何アルか、これ」

神楽が拾ったそれは、エリザベスの形をしたキーホルダー。持っているボードには、おめでとうと書かれている。

「相変わらず、発想が銀河の彼方だよな…ツラは。感動の瞬間を台無しにしゃがって」

銀時が小さく呟いた。

S c e n e 3 . A s n o w w h i t e d r e s s a n d a c r i

長くなりすぎたような気がします……（汗）
ていうか、土方のプレゼントがひどい！！

こんな駄文でも読んでくださる方に感謝ですm（――）m

結婚式が終わり、みんなで近くのレストランで夕食をとった。昔話をして笑い合っているうちに、いつの間にか時刻は午後8時を回っていた。神楽は総悟の運転する車で、新しい家へと向かった。

銀時は、本当はその後結婚記念パーティを開くつもりだったらしいが、総悟は疲れたと言って聞かなかった。神楽も、ここ数日の事が忙しくて疲労がたまっていたので、それに同意した。

20分ばかりのドライブの後、着いたのは真っ白な大きな家。小洒落たデザインで、ベランダには装飾が施しており、庭も広い。神楽は目を輝かせた。

「総悟、この家、すごいアルっ！！ありがとうネ！！すっごく、すっごく嬉しい！！」

感激のあまり神楽は総悟に抱きついた。不器用な総悟はこういう時どうしていいかわからず、とりあえず中に入ることを提案した。

外もさることながら、中もとてもきれいだっただ。白を基調とした、落ちついた色の家具でまとめられたデザイン。温かみのある、オレンジ色がかった光。

「俺が家具をみんな選んで、配置したんでさア」

総悟は自慢げに言った。

「ふーん。…意外アル」

「何だよその言い方！」

「総悟はもつと趣味が悪いと思ってたネ。マニアックな趣味とかあるし」

「ねエよ！てか、そういうの関係ねエ！…それより、何か他に言う事無いのか？」

「……」

神楽はしばらく考えて、

「…ありがとう…??」

「何で疑問形なんでさア」

総悟は神楽の頭を軽く小突いた。

神楽も負けじと殴り返す。

「あ痛たたたた！！！てめつ、普通この状況で本気出すか！？」

「ふん、お前が悪いアル！」

「……」

「……」

総悟は半眼になって神楽を見る。神楽も、総悟を見つめ返す。神

楽のその目が真剣なので、総悟は思わず笑い出した。

「……くつ、おつかしーの！！」

「何アルか、いきなり」

神楽が首をかしげる。総悟は、神楽の頭に手を載せた。

「何でもねエ、何でも。さ、今日は疲れたし。風呂入ってこよつと」

「あああつ、私が先！！」

「……じゃあ一緒に入るか？」

「嫌アル！！変態変態変態っ！！！！バツカヤロオオオ！！！！！！」

神楽は恥ずかしさでいっぱいになり、その勢いで総悟を突き飛ばした。総悟はつんのめり、このままじゃ殺される……などと言いながら風呂場へと避難した。

「今一緒に入らなくなつて、結局は同じことだろイ。どーせ後でゆつくりお前を頂くことにな——」

未練がましく振り返る総悟に、神楽の猛烈キックがクリティカルヒットした。

「死ねエエエエエ！！！！！！」

すると、その言葉を聞いた総悟の顔に、一瞬だけ悲しみが浮かび、表情が崩れた。

——まさに一瞬だけだった。

神楽は気付かず、ただ拳を固めて威嚇していた。

Scene 3 . A snow white dress and a cri

・・・下ネタを入れてしまった(^| ^ ;)
よりによって甘いマスクの総悟君が!!

これでは次話は年齢制限が必要に・・・

・・・ならないように努力します(笑)

Scene 4・A truth and the sadness (1) (前)

えっと・・・注意書きです。

不健全！！というほどではないので年齢制限は引きませんが、ちょっと2人があんなコトやこんなコトをするので、苦手な方はバック推奨です。

一般的な携帯小説程度だと思ってください。
強いて言うなら・・・R12ということ。

Scene 4・A truth and the sadness (1)

「ふぁー…いい湯だったアル…」

結局総悟の後に風呂に入った神楽だが、万事屋の生ぬるいのは大違いだと、嬉しそうに寝室に入った。

しかし答えは無く、寝室も暗い。総悟はすっかり眠っているようだ。

「…私も、寝よ…」

神楽はさつきまでの警戒心はどこへやら、温かそうなダブルベッドに這い上がり、総悟の隣にもぐり込んだ。冬も近づく11月、人の体温というのは本当に落ち着くものだった。神楽は安心しきって、幸せな思いでまどろんでいた。

すると、突然総悟がむくりと起き上がった。

「わわわわわっ！…！」

神楽は悲鳴を上げ、部屋の隅へと移動した。

「っ、そっ、総悟っ！…！」

「…お前…逃げることねエだろ」

「やだっ！…！」

両手で、神楽は自身の肩をしつかりと抱く。

「やだはねエだろ、やだは。ていうか、俺は何もそのために起き上がったんじゃねエしよ…。話が、あるんでさア。だから、こっち来い」

「……」

神楽は少し考えて、何もしないでと念を押してから、総悟の隣に座った。

「話…っていうのはな」

「…うん」

「それは…」

神楽には、総悟が珍しく迷っているのが分かった。

「早く言つてヨ」

「じゃあ言つけど…どんな内容でも、取り乱すなよ」

それを聞いて、神楽の心に嫌な予感が走った。

止めて。聞きたくない。怖い。

そう思つたけれど、気持ちとは裏腹に、彼女は頷いていた。

「あれは、1か月前の事だった。將軍家の娘が、何者かに連れ去られたんでさア。幕府の機密情報と引き換えに、彼女を返すと言って攘夷浪士の仕業だった。真選組の出番だった。俺は真つ先に監禁場所を発見した。そして――抵抗する犯人を、斬り殺した」

総悟は一旦、言葉を切った。神楽は妙な胸騒ぎを感じながらも、それだけの話かと思つてほつとした。

「な、なあんだ…ただの自慢話アルか…」

すると総悟は、静かに首を振った。

「俺は犯人を斬った時、將軍の娘にも刀傷を負わせてしまった。その顔に、5cmくらいの長さの、小さな切り傷を。ただそれだけでイ。とはいえ俺は、嫁入り前の娘の顔に怪我を負わせた無礼者。御詮議の末、切腹が決定した」

――切腹。切腹。切腹。どういう事…？

神楽の頭の中に、その単語がチカチカと浮かんでは消える。

そんな中、彼女を不幸のどん底に突き落とす一言が発せられた。

「日にちは延ばせるだけ延ばしてもらった。でも…ここまでが限界。

…俺は、明日死ぬ」

現実味がない。意味が分からない。

衝撃のあまり呆然としている神楽を、いきなり総悟が抱きすくめた。

「でも俺は、今ちゃんと生きている。だから…俺の命の証を、今のうちに、お前自身に刻み込んでおきてエ…」

神楽の首筋に、総悟の熱い息がかかる。そしてそこに、ポトリと水滴が1つ。

「なア…お願いだ、神楽…。お前が今日、結婚式で疲れているのは

分かっている。さつき嫌だって言ったな。それも分かっている。でも、俺の最後のわがままを、許してくれ……」

闇の中、総悟の表情はあまり分らない。でも、声が震えている。そして、その目から止めどなく溢れる涙が、音もなく神楽の体に落ち、パジャマに小さく染みを作った。

神楽は信じられない思いで、恐る恐る総悟の胸に手を触れた。とくん、とくんと、総悟の生きている印が、手を通して心地よい響きとなって神楽に伝わってくる。

——生きてる、総悟はちゃんと生きてるのに……。

「総悟。いいヨ……抱いて、欲しいアル……」

瞬時、神楽の体がぐらりと傾いた。そのまま、ベッドに倒れ込む。ベッドは柔らかく沈み、2人分の体重を支えた。

自分の上にいる総悟の泣き笑いの顔を見て、神楽の頬にも涙がー筋、跡を作った。

それを慰めるように、総悟は神楽の頭を優しく撫で、嗚咽を漏らすその小さな口を、しっかりと自分の唇で塞いだ――。

月光を浴びて2人の影は、ゆっくりと1つに重なった。

S c e n e 4 : A t t r u t h a n d t h e s a d n e s s (1) (後

ハイ。

というワケで、ようやく総悟君のキモチが明らかになりました。

あと、読んでくださってる方に迷惑をおかけしますが、この後1週間くらい更新を停止しますのでよろしくお願いします。

(ちゃんと続きは考えてあるんで大丈夫です 笑)

Scene 4・A truth and the sadness (2) (前)

すいません・・・間があきました。

テストと体調不良のせいです
↑

では、読んでやってください。

Scene 4・A truth and the sadness (2)

神楽の身なりを整えてやった後、総悟は謝った。

「すまねエ」

頭を深々と下げ、心から何かを反省しているようだった。

「何で…アルか？私、痛くなんかないネ…嫌でもなかったアル…だから…」

神楽の瞳は、純粹に総悟を心配している。

「いや……」

総悟は、息をついた。

「全て、俺のエゴなんだ。

お前との結婚を決めたことも

…綺麗な指輪を買ったのも、

チャペルを用意したのも、

ウェディングドレスを注文してやったことも。

この家も、そして揃えた家具も。そして今の行為も含めて…みんな、俺のエゴでさア。

お前にいい事をしてやったと錯覚して。それで、自分ひとり、勝手に満足して。
今気づいたんでイ…これは、俺の人生を美しく飾り立てただけのことだって。

そしてお前を…世界で最も愛したはずのお前を、

縛り付けたただけだ。

俺は、何て酷い男なのだろう。何て馬鹿なのだろう。そしてここ数日の行動は、

1つ残らず、

何て虚しいものだったのだろう…」

絶句している神楽に、総悟は語り続けた。

「お前は、俺と結婚した事なんて、無かった事にしろ。今した事も、みんな忘れる。新しい人と一緒になって、幸せな人生を歩め…」

突如、総悟の頬でバチン！！と大きな音がした。彼は不意を突かれてよろめいた。

「…っ！！」

総悟が顔を上げると、そこには怒りを露わにした神楽がいた。彼女が力一杯に総悟の頬を張ったのだ。

「痛かったアルか？ふん、私の手だって痛いアル。同じ事ネ。総悟が辛いのなら、私も辛い。逆に総悟が嬉しい事は、私も嬉しい」

「お前…」

「総悟は今日、誓ったアルな。私を一生愛しますって。私も誓ったネ。総悟は、その私の誓いが、そんなに簡単に破れる物だとも思ったアルか？私が、お前と結婚した事を、平気でなかった事にできるとでも思ったアルか？私がお前以外の人間と、最高に幸せになれるとでも…思ったアルか？」

神楽は、総悟の胸を力任せにドンドンと叩いた。

「私の気持ちなんて…っ、知らないで…結婚できて、どれだけ…嬉しいか、総悟に選ばれて…どれだけ、感激したか知らないでっ！！今のことだってそう…忘れろって…私が、どれだけ幸せを感じたかもう、今まで生きてきた中で、最高の瞬間だった…のにつ、それを知ろうともしないで…拳句の果てに、む、虚しいもの…っ、だなんて、言っ…！！！」

神楽は赤子のように泣き叫んだ。

「エゴだなんて、言わないで！私のためじゃなかったの？…結婚式で誓ったのは、あれは…ただの嘘だって言いたいアルか…！？」

神楽がここまで徹底的に本気で総悟に反発したのは、何年ぶりだろう。いや、そもそも、ここまでの事は無かったかもしれない。

総悟は自嘲気味に笑った。

「俺ときたら…絶対にこんな事しねえって決めたのに、お前をこんな風に泣かせちゃった…」

しゃくりあげる神楽の細い背中を、彼はさすった。

「そっだ…神楽の言うとおりだ。俺の心がねじ曲がってたのかもし

れねエ。ただ、疑問が残っただけでイ。俺がお前にしたことは…本
当に、これで良かったのか、お前は幸せだったのか…」

すると神楽は、目に涙をためたまま即答した。

「もちろん、アル」

総悟は、それを聞いて安心したように神楽の体を支え、ベッドに
寝かせた。

「良かった。もう、思い残す事なんてねエ…」

神楽に布団を掛けて、自分も横になった。

神楽は朝まで起きていて、ぎりぎりまで総悟を見ていようと思っ
ていたのに、すっかり泣き疲れて彼の腕の中で眠り込んでしまった。
彼のパジャマの裾を、ぎゅっと握りしめたまま。

「そんなに俺にしがみ付いてばかりだと、幸せになんか…なれないでさア」

彼は、神楽の手を取って、そつと自身から引き離した。

「でも…神楽。俺の存在が、消えた後もお前を苦しめはしないか

俺は心配でさア」

総悟が、神楽にというよりは、自分自身に向かって言った。

神楽は深い眠りの底で、もはや彼の声に反応もしない。総悟は哀しそつに笑った。

「おやすみ、神楽。…そして、」

総悟は、神楽を起こさないように、その頬にそつと唇を落とした。3年分の愛をこめて。

「...おはよう」

S c e n e 4 . A t t r u t h a n d t h e s a d n e s s (2) (後

やっぱり死ぬんでしょうか、総悟君は。

私の設定だと・・・(r y

というわけで、更新も遅れてしまった事だし、読んでくださってる
皆さんには、ご迷惑おかけしました(^ー^ ;)

Scene 5・The bright red blood and the

あらかじめ書いておきます。

えーと・・・この話は、もはやパクリ以外の何物でもありません（笑）

なので、これ絶対パクった！！って思っても無視してください。
ちなみに、嵐の熱烈なファンの方は読まない方が・・・（ry

Scene 5・The bright red blood and the

翌朝、神楽はハッと目を覚ました。

「総――」

慌てて隣を見る。

シーツにしわが残っていて、ついさっきまで総悟がそこにいた様子だったのに――姿が無い。

「総悟、総悟っ――!」

神楽が声を上げる。

その声は、広い家中に反響しただけだった。

「やだ…総悟――!」

彼女は服も着替えず、玄関に急いだ。

総悟の靴は、無かった。

「そんな――」

神楽はぺたりと床に座り込んだ。
その時、視界に入ったものがある。

『行ってきます』

まとまりの無い字でそう書かれた紙切れと、その下にはCD。こ
丁寧プレイヤーも一緒に置いてある。

神楽はもつれる指で、それを再生した。

流れてきたのは、今の神楽の気分をあざ笑うかのような、明るい
ピアノの前奏だった。その曲に、彼女は聞き覚えがあった。近頃大
人気の5人組アイドルグループ、『風』の『So Sweet L
ove』だった。

“きらめいたのは炎でも電球でもなくて 君だと分かった時から
あの悲しげな雲のずっと上には広い青空 Love Story
流れ出す”…

胸が一杯になった。店などでよく聞く、何の変哲もない曲なのに、
それは神楽の心を暖かく満たし、体中を満たし、同時に強く、苦し
く締め上げた。

“ 傷ついた記憶は昨日の彼方へ 愛の唄よ風になれ

思い出ずつとずっと忘れない空　2人が会えなくなつて
こんな好きな人に　出会う奇跡二度とない

光つてもっと最高のLady　そうさきつと願ひ届く
信じる事がすべて　So Sweet Love

そこからいつも見えなくても　心は傍にいるよ　広がる愛しさを
胸に

あの負けず嫌いで　気の強い　僕を変えた君の手
Love Story　はじけ出す

喧嘩をしていた2人の心は　ここで一つ　重なって
思い出ずつとずっとたどった道　僕が遠くへ行つても
君の辛い夜は　戻って寄り添うから

笑つてもっと　最高のLady　涙は流さないで
止まない雨は無いよ　So Sweet Love”…

曲が終わり、神楽が再生をストップさせようとした時。
大好きな声が聞こえてきた。

『ええと…俺らしくない、妙な事をしてごめんなさい』

総悟が、曲の最後にメッセージを吹き込んだらしい。神楽はスピーカーに耳をくつつけるようにして聞いた。

「俺は不器用で、どうしても自分では思いを伝えられなくて…。でも、辛くて耐えられない時にはこの曲を聞いてくれ。それで神楽の悲しみを、少しでも癒す事が出来れば、俺は嬉しい。そして、泣きたいときには、泣きなせエ。涙と一緒に、辛い記憶も消えて行ってくれるだろうと思えますア。…俺は、もっとお前を幸せにしてやりたかった。今思い返してみても、つくづく力不足な彼氏…あ、いや、旦那だったよな。でも、お前と過ごした時間は俺にとってかけがえの無いもので、何にも代えられない宝物でイ。お前も同じことを感じていた事を、願う。…まだまだ言っていてエ事はたくさんあるが、長くなるんで自粛。

そして最後になりましたが…。

っと、その、俺は…だから…ハア。

かつ、神楽を、いつまでも、愛してまさら！！！」

それで終わりだった。

「……」

神楽は、今にも泣いてしまいそうなのを、必死でこらえた。

総悟は、これで私に別れのあいさつを伝えたつもりかもしれない。

でも私は…まだ…。

神楽は口元をきりりと結んで、パジャマの上からチャイナ服を羽

織り、人目も気にせず、外へ飛び出した。

S c e n e 5 . T h e b r i g h t r e d b l o o d a n d t h e

はい。

手抜きだとは思えないですね。

思ってもらって結構です↑

ちなみに著作権は・・・大丈夫ですよ・・・ね??? (↑え)

Scene 5・The bright red blood and the

・・・注意です。

若干、残酷な描写があります。

なので、苦手な方はお引き取りください。

(最近、注意書きが多いような・・・)

Scene 5・The bright red blood and the

昨日とは打って変わって、冷たい雨が容赦なく彼女の体を打つ。彼女は、雨に濡れて冷えていく自分の体の事は気にも留めず、ただ手足を動かし続けた。

——総悟は力不足じゃなかったって、言わなきゃ。一緒にいて、楽しかったよって。そして…私にメッセージとして残してくれたように、私も総悟を愛してますって、伝えなきゃ…。

風のごとく、矢のごとく、神楽は見慣れた街を走り抜けた。

——神様、仏様。そんな物は、この世に存在するのだろうか。運命は、何も悪い事をしていないのに、総悟の命の灯火を、無情にも消してしまおうとしている。…でも、もしも神様や仏様がいるのであれば…。

「最後に、もう一度だけ、逢わせてください…！！！」

それは神楽の、全身全霊を込めた願いとなって、漆黒の空に吸い込まれていった。

最後の曲がり角を抜け、神楽は屯所の門に体当たりして中に走り込み、障子突き破って部屋に転がり込んだ。

「総悟つ——!!!」

腹部から血を滴らせ、苦痛の表情の中、総悟は神楽を見つけた。

そしてその首に迫るのは、介錯人である土方の剣——。

「やめてっ——」

土方にその声は届かず、辺り一面が赤に染まった。

それは悪夢そのものだった。

神楽の体から、力が抜けていく。そのまま彼女は、そこに崩れ落ちた。

「チャイナさん」

近藤が神楽に呼びかけた。神楽はそれに答えなかった。

「総悟。…総悟…」

首を失った総悟の体に向かって、神楽は這いずっていく。

「…総悟」

力なくだらりと下がった彼の腕は、もはや神楽を抱く事は無く。

「ねえ…返事、してヨ…」

頭部は近くに転がっている。

表情を失ったその顔は、神楽を見て笑う事もなく、神楽のために泣く事もない。血の気を失ったその唇は、神楽に触れる事もない。彼女の大好きだった、栗色のサラサラの髪も、血でべっとりと固まっている。

「総悟、私を1人にしないで!!」

神楽は思わず叫んだ。

「ねえ。私…昨日の夜の事、覚えてるネ。あの感覚も、総悟の体温も、まだちゃんと残って…」

昨晚、彼が自分を抱いてくれたのは…あれは、今から何時間前の事だっただろう。今となつては、それが幻であったかのように思える。

総悟の命は激しく燃え…いや、あの激しさ自体が彼の命そのものだった。そして、赤々と炎を上げていたそれは、所詮夏の終わりの打ち上げ花火の、最も美しい瞬間と同じような物で…美しさに感動して

いるうちに、いつの間にか儚く散ってしまう。

神楽は、突然その事を悟った。

あれは、総悟の最後の力だった。

総悟の、最後の輝きだった。

彼は、それを惜しげもなく、全て自分に向けてくれた――。

その優しい彼が、こうして今、赤黒い物体となり、床に無惨に転がっていないければならない理由が…変わり果てた姿にならないければならない理由が、一体この世界のどこにあるというのだろう。

総悟の笑う顔、怒る顔、悲しむ顔、真剣な顔。

生前、神楽に見せた表情の1つ1つ、仕草の1つ1つが、彼女の脳裏に走馬灯のように蘇る。

——雨がやみ、晴れ間が差した。

神楽の涙が、陽光に反射してキラキラと光った。

「…痛かったよね、総悟。そんな風にお腹を切って、首まで…無しちゃって」

もうどうにも耐えられなかった。

神楽は、総悟の亡骸を抱き締めた。

…ぬるり。

彼女の胸に、生温かい血が付いた。

それを認識した途端、神楽の心の中で何かが切れた。

「うあああああああつつ！！！！！！！！！！」

——この世界は醜い。この世界は、私から総悟を奪った。

神楽の夜兎の本能が、覚醒した。

——みんなみんな、壊れてしまえ！！

Scene 5・The bright red blood and the

本能が覚醒すると、どうなるんだっけ・・・

吉原篇で見た覚えがあるけど、忘れてしまった（笑）

というワケで、次の話は適当に済ませます
↑

Scene 5・The bright red blood and the

次話が書きあがりました。そして、本文に入る前に、・・・

更新を停止していたこの数日間の中に、大地震が発生しました。

私は東北・関東地域にいなかったので無事でしたが、読者の方々は、無事なのでしょうか。

被害に遭われた方々に、心より早くの復興をお祈り申し上げます。

そして、今この文章を読んでいる方に。

被害に遭われていない方も、少しでもいいですから、被災地の事を心に留めてください。（まあ、皆さん気にしてらっしゃると思います
が）

それではどうぞ。

Scene 5・The bright red blood and the

近藤や土方には、その時何が起こったのか理解できなかった。

でも、よろよろと立ち上がった神楽の目を見て、背筋を震わせた。

瞳孔は開き切って、狂気の光を宿らせ…可愛かった青い目には、
生気が無い。そして手には、総悟の愛刀。

「近藤。私はお前を許さない。総悟を捜索に行かせたのは、お前だ」

そして彼女は、土方の方を見た。

「土方。私はお前も許さない。事実上総悟を殺したのは、お前だ」

地の底から響くような、恐ろしい神楽の声。

2人ともショックを受け、何も答えられないようだ。

「お前ら…泣いてるな。総悟が死んで、悲しいか？ふふ…でも、安心して。2人とも今すぐに、総悟の所に連れて行ってあげるから…」

神楽が、すらりと刀を抜いた。

彼女の、総悟に対する例えような愛は、刹那の内に憎悪へと豹変し、悪魔と化して牙をむく――。

刀を両手で構え、神楽は土方に突進する。

土方は咄嗟に小太刀を抜いて、その背で神楽の攻撃を受け止めた。しかし、本能を取り戻した神楽の力に、長く耐えられるはずもなく

「ぐあああつー!!」

彼はいとも簡単に倒れてしまった。

神楽は不気味な笑いを浮かべながら、その喉元に刀を突き付けた。

「これでお前は、お終い」

「待て、チャイナ…考え直せ」

土方は額に汗を浮かべて、懇願する。

「何を考え直せって？」

「何をつて……」

「お前に用は無い。死ね——」

神樂が、まさに土方を殺そうとしたその時。

《止める！！》

彼女の心に、声が響いた。

大好きな、大好きな、総悟の声が。

「止めるな、総悟！」

神楽は吠え、再び刀を振り降ろそうとした。

しかし、手が動かない。

「…っ！！！」

強い力で押さえつけられているように、体の自由が利かないのだ。

《神楽、テメーは俺のために手エ汚すな！！》

再び、声がした。

「ふ…あ…」

そのまま神楽は、意識を失った…。

S c e n e 5 · T h e b r i g h t r e d b l o o d a n d t h e

ありがとうございました。

S c e n e 6 : A l o n e l i n e s s a n d t h e d e s t r u c

はああ。

ずいぶん間が空きました・・・すいません・・・。

これからちよびつとずつまた頑張りますので、よろしくお願いいたします。

Scene 6・Aloneliness and the destruc

Scene 6・Aloneliness and the destruction

…白い壁が見えた。

そして、鼻にツンとくる薬品のおい。

神楽は、病院にいた。

「うつ…ん…」

彼女は、うつすらと目を開けた。その途端、近くで見守っていた銀時が彼女を抱きしめた。

「辛かったよな…神楽。大切な人が、いきなり消えて。でも…俺はそれどころじゃなく、心配だった。お前が泡を吹いて倒れたって聞いて。ようやく目を覚ましてくれて、安心した…」

見舞いの者たち——新八、妙、近藤、土方も、安堵のため息をついた。

「えつと…」

記憶が、少しずつ戻ってきた。

切腹を言い渡された総悟の、最後の姿を一目見ようとして屯所に向かって…。気づいたら、目の前が、血。それからは暗闇の中をもがくようにバタバタしていて、覚えがない…。

でも、分かる事が1つ。

総悟は、死んでしまった…。

「銀…ちゃん。私、いつ、退院できるアルか…？」

「体に異常はないそうだから、今日でも大丈夫だよ」

「…今日って、何日…アルか…？」

「11月7日の、午前9時よ」

妙が、神楽を落ち着かせるように言った。

…ということは、自分は丸1日も眠っていたのか。

「じゃあ、早く家に…」

そこまで言って、神楽はたと気が付いた。

家に、もう総悟はいない。自分はその家に帰って、耐えられるだろうか…？

「私…家に…」

耐えられない、かもしれない。

でも、私のいるべき場所は、あの家。真っ白で、大きくて、綺麗な…2人の家。

「今すぐ、戻りたい…」

神楽は、かすれたような細かい声で、そう言った。

彼女が何気なく見ている病室の窓の外。

すずめのつがいが、幸せそうに舞っていた。

それはそれは楽しそうに、…まるでついこの前までの総悟と神楽のよう。

Scene 6・Aloneliness and the destruc

まだまだ続きます。

そういえば、今日ミツバ編を久しぶりに見たんですよ。
もうっ…涙ボロボロ…。

私の作品は…ミツバ編の足元にも及ばないって痛感しました
↑

Scene 6・Aloneliness and the destruc

また、続き書きましたよー!!

更新した途端に、ユニークアクセスの最高記録更新したので、
何というか、書かなきゃならない…みたいな（笑）

それではどうぞー。

Scene 6・Aloneliness and the destruction

「銀ちゃん。ここまででいいアル、ありがとう」

家の前まで送ってくれた銀時に、神楽は頭を下げた。

「…大丈夫か？」

銀時は気遣うように聞く。

「うん、大丈夫ネ」

神楽は無理に微笑んで見せて、ドアに手を掛けた。

銀時がその様子を見て、背を向けて戻っていく。

「……」

鍵を回すと、カチャリと軽い音がした。神楽の前髪を、冷たい風が一度、揺らした。

「…ただいま」

おかえり、と言う甘いテノール声が迎えてくれる事を、無意識のうちに彼女は期待していた。

でも、聞こえてきたのは、電化製品の作動する無機質な音だけ。彼女はため息をついて、中に足を踏み入れた。

一昨日とは全く違う空気の流れが、神楽の足取りを重くする。

キッチンを見た。

——総悟にご馳走を作ってあげる事は、とうとう無かった。

神楽はさっと目を逸らし、何も見ないようにして、まるで何かから逃げるように寝室に向かった。

総悟の寝息が、聞こえそうで聞こえない…。

彼女はそこからも逃げ出し、リビングに入った。

「…あ…」

リングには、結婚式の時にもらった贈り物の数々が置きっぱなしになっている。

そのうちの1つ、家内安全のお守りを、神楽は手に取った。

「ごめんね、新八。でもこんな物、もう意味無いアルよ……」

彼女の手の中で、お守りはぐしゃりとつぶれた。そして、絶対安産の方も同様に。

次に、ベビー服が目についた。

「アネゴ。これを着せられる子は…もう、できないネ……」

彼女の手によって、ベビー服は引き裂かれた。

びりびりと、可愛いその服は、ただの布切れとなっていく。その様子を見ている神楽に、不思議な感情が芽生え始めた。

心が、ずっと軽くなるような。

悩みが、消えていくような。

それはまさしく、快感だった。

マヨネーズのクーポンを破り、写真立てを割り。

「ははっ、あはは……」
神楽の口から、笑いが漏れた。

——楽しい。もっとやりたい。

彼女は何かに取りつかれたように、贈り物を壊しはじめた。

ラケットの軸を、ボキボキと折る。

「あははは、はははははっ！！」

マグカップを、フローリングの床に叩き付けた。パリン！と乾いた音を立てて、それは水色と桃色の破片になった。

もっとも、キャサリンのローションは放置されていたが…。

たった数分で、神楽の周りにはゴミの山ができた。

「…ははは…」

彼女は、何もおかしくないのに、ただケタケタと笑っていた。

もう、感情がコントロールできなくなっていたのだ。

そして変化は、それだけではなかった…。

Scene 6・Aloneliness and the destruc

神楽ちゃん、病みすぎです。

自分で書いてて言うのもなんですが、神楽ちゃんがかわいそうにな
ってきました。

ちゃんとハッピーエンドにできるんでしょうかねえ…。

私の頭の中ではハッピーに終わってるんですけどね…^^；

S c e n e 7 . A f u n e r a l a n d a n a b n o r m a l m o

またしても間が空きました。
どうもすいません・・・。

やっぱ、中3になると忙しいんですね・・・orz

Scene 7・A funeral and an abnormal mo

贈り物をすべて破壊しつくした後、神楽はよろよと寝室に戻っていった。

そして、疲労のためかベッドに大の字に横たわり、あつという間に寝息を立てはじめた。彼女の寝顔は不思議なくらいに穏やかだったが、どんな夢を見ているのか、目尻に涙がたまっている。

この家で…この部屋で過ごす2度目の夜は、ひどく寂しかった。

外ではカラスが最後に一声鳴いたのを合図に、夜の静寂が訪れた。

翌朝早くに、神楽は電話の鳴る音で起こされた。

「……っ」

彼女は薄目を開け、少しうなってから受話器を取った。

「もしもし…」

『神楽、大丈夫か』

相手は銀時。

「あ、銀ちゃん…」

『…こんな時に言うのも何だが、葬式は今日の昼過ぎ、2時ごろからになったそうだ』

銀時は、暗く沈みきった声で告げた。その口調からは、やるせなさがあふれている。一方で神楽は、昨日と同じようなあの笑い声を上げながら、力なく応答した。

「はは…っ、葬式？…誰の、アルか？…誰か、亡くなつて…？」

『っ！！』

銀時が、電話の向こうで息を？む。

『神楽、お前…辛いのは分かる、でもな、そんな風に自分の気持ち偽ったらオメー…総悟君が…』

「…そう、ご？……誰ネ？」

『はあ！？』

沈黙が数秒流れる。

それから、銀時がゆっくりと尋ねる。

『神楽。…お前の旦那、沖田総悟だ。…知ってんだろ？ホントは。あんなに仲が良かったんだから…』

「え？…あはつ、銀ちゃ…？また、私の事からかってるアルか？いないネ、旦那なんて。旦那だって、彼氏だって、そんな人…」

『嘘だろオイ！じゃあ聞くけどよ、お前の今いるその家、誰が買ってくれたってんだ』

「えっと…地球で暮らすって決めた時に、パピーが…」

神楽はすんなりと答えた。

『くそっ…』

銀時はようやく現実を飲み込んだ。これがただならぬ事態だという現実を。

『とにかく神楽、俺が今からそっちへ行く!』

電話はガチャンと乱暴に切られ、あとには神楽が1人、ぼーっとしていた。

「銀ちゃん…来る、アルか。…あは、は…」

神楽は、依然笑い続けていた。

S c e n e 7 . A f u n e r a l a n d a n a b n o r m a l m o

・・・というわけで、感想よろしくお願いします！（笑）

Scene 7・A funeral and an abnormal mo

またまた、時間が空きました。

何ヶ月経つんでしょうねえ・・・覚えてらっしゃる方、いるんでしょうか?? (汗)

言い訳をさせてください。

何しろ受験生なのです。

将来がかかっているんです!・・・多分w

それじゃあ、始めます。

Scene 7・A funeral and an abnormal mo

それからほんの数分後、銀時が合鍵を使って家に飛び込んだ。

「神——」

そして直後、言葉を失う。

ぬいぐるみのお人形のように可愛かったその顔は、今や蠟人形のように生気が無い。ビー玉のように澄んでいたその瞳はくすみ、虚ろだった。つい先日まで血色がよく、柔らかかったその頬——総悟が幾度となく唇を触れたその頬も、今となっては青白い。

一晩でこんな風になってしまふなんてと、銀時は目を疑った。

「神楽……」

「ああ、銀ちゃん。…はは、今、お茶入れるアルよ……」

神楽は危なっかしく立ち上がり、湯呑みを棚から取ろうとして手を滑らせた。

「オイ、無理すんな……」

銀時は神楽をソファに座らせ、自分も向かい合った。けれど何を言えいいのか分からず、時間だけが過ぎていく。

彼は、自身の無力さを呪った。

それと同時に、総悟が神楽に与えていた影響の大きさ、そして注いでいた愛の深さを思い知った。

そして、だからこそ余計に何も言えなかった。

神楽に取って、総悟を亡くしたのはこの上なく耐えがたいことであり、ましてその悲惨な死の現場を目撃してしまったのだから、心に受けた傷は計り知れない。そして彼女は、本能的にその記憶を拒絶している。その辛い記憶を抹消し、自分の理性を何とか保とうと…。

銀時は、唇をぎりぎりとしめ、拳を固く握った。そのせいで口の端は切れ、握られた手のひらには爪が食い込み、血がにじんだ。

「銀ちゃん。…大丈夫、アルか？」

神楽は心配そうに訊く。

——コイツ、自分がこんな状態なのに、俺の心配なんてしゃがって…。

「ああ、何でもねえ」

銀時は無理な笑顔を顔に貼り付けて、神楽を見た。

「ふーん。あ、ねえ銀ちゃん。…ははっ、新八が——」

神楽は沈黙に耐えきれなかったのか、話し始める。しかし銀時はそれを制した。

「神楽。俺が今から話すことは信じられないかもしれねえ。でも何も言わないで、最後まで聞いてくれ…」

「……」

神楽は押し黙り、銀時を見た。

そして銀時は話し始める。

神楽には、3年間付き合ってきた彼氏がいたこと。

その人は沖田総悟といい、真選組で最年少でありながらも、同時に一番隊隊長で、とても優秀な剣の使い手だったこと。

2人はとても愛し合っていたこと。

遂に、11月5日に結婚したこと。

そして翌朝、彼が死んだこと。

長い、長い話だった。

神楽は終始黙っていた。

「——神楽。これで、全部だ」

銀時はそう締めくくり、神楽を見る。

「…その、沖田総悟って人…」

神楽は目を伏せた。

「私。知らないネ。…知らないヨ…何一つ、全部…」

銀時はひとつため息をついてから、優しい目で神楽を見た。

「さあ。…行くぜ。葬儀場、連れてってやる」

S c e n e 7 . A f u n e r a l a n d a n a b n o r m a l m o

次、いつ書けるかわかりません。

でも、できたら感想ください。励みになるので！（笑）

ちゃんと今年度中に、完結させ……たいです。

Scene 8 . A nothingness and a funeral

んと、何とか、死にそうになりながら（笑）書き上げました。
神楽ちゃんはどうなってしまったんでしょう？

それは作者もわからない。
↑

Scene 8 . A nothingness and a funeral

原付の背で、体が揺れる。

神楽は、色を失った景色が自分のわきを過ぎゆくのを、黙って見ていた。前に座る銀時の背中は何も言わず、湿った風にそよぐ銀色の髪だけが、きらきらと反射して神楽の目に届いた。

空は、天気予報が外れて暗い灰色。銀時の気分は、ますます重く沈み込むばかりだった。葬儀場への道のりが、永遠にも感じられる。すり抜けた北風が銀時のため息をさらい、神楽の心を凍てつかせていった。

何があったのだろうか。私と、死んだという旦那の間に。そしてここ数日の空白の時間は？ ああ、まるで自分にぽっかりと穴があったみたい……。

悲しかった。怖かった。

けれど、そう思えば思うほどに、虚無的な笑いが口から漏れた。体が、心とは正反対のことをするのだ。

「あはは…あはは…」

私の置かれているこの状況、これはもう、笑うしかない。

狂っている。自分を含めた、世界のすべてが。狂っていて、おかしくて、私を苦しめて……。

「あはははは、あはは…」

「気をしっかり持て！神楽！」

銀時が鋭く言った。しかし効果はなかった。

「ははは…銀ちゃんまで、私を、苦しめる…あはは…」

神楽は笑う。まばたきもしないで、気持ちの入っていない涙を流す。

「…もうすぐ、着くから…な。神楽」

原付がカーブを曲がる。神楽の体は力なく、ただ左右に揺れるがまま。

それからしばらくし、見えてきたのはいかにも安そうな葬儀場。そしてそこには、黒山の人だかり。

銀時が原付を止めて神樂を降ろすと、土方が走ってきた。

「ああ…来てくれたのか、万事屋」

彼にしては珍しく、銀時に頭を深々と下げる。

部下を失った上司の双眸はいつもの鋭さはなく、行き場のない気持ちだけがありありとあらわれていた。苦しんでいるのは神樂だけではない、そのことを銀時はやっと思い出した。

「もちろんだろうが」

「ありがてえ…。チャイナ、大丈夫か？」

「え…私??」

神樂はきょとんとし、また笑い声をあげた。

「…チャイナ？どうし——」

土方が「どうしたんだ」という前に、銀時はあわてて遮った。

「あ、あの、これくらいで。神楽、あんまり外にいても寒いから、中に入るぞ」

「……」

怪訝そうな顔で、土方は彼を見る。銀時はすれ違いざま、

「詳しいことは後で」

と土方に耳打ちした。

S c e n e 8 . A n o t h i n g n e s s a n d a f u n e r a l

最近、ボカロにハマっているんです。

だから更新が遅れました。（関係ねーよ）

パラジクロロベンゼンを聴きながら書きました。

14歳で夏でバカだった、中二病の作者より。w

Scene 8 : A nothingness and a funeral

褒められるとつげ上がるタチの私は、感想をいただいたので、調子に乗って続きを書きました。（単純すぎ）

ますます、神樂がかわいそうです。

作者はDSなのか？（違うと思うw

Scene 8 . A nothingness and a funeral

外も人だかりがひどかったが、中もごった返していた。祭壇や遺影も見えないほどで、暖房と湿気と、充満した二酸化炭素が銀時に軽くめまいを起こさせる。

「あはは、あはははっ……」

神楽は笑い続けながら、銀時の後について中に入っていく。彼女のまとう異様な空気に、ざわついていた室内はさつと水が引いたように静かになった。

「誰？あの子」

「分かりませんねえ……」

「ご存じないの？ほら、故人の奥様」

「え？あんな女の子が？っていうか、あの子、どこか頭おかしいんじゃない？」

ひそひそと、噂話が飛び交う。

神楽は自分の悪口が言われているのも知らず、ぺたんと畳に座り込んだ。そしていきなり、

「あーっはっはははは！ー！ひやはははっ、はははっ！ー！ー！」

と大きな笑い声を上げ始めた。

「！ー！」

周囲の人間はギクツとして、変なものでも見たかのように、神楽と銀時からそろりそろりと離れる。

「あはははは、あーっはっはっは！ー！」

「おい、神楽……」

銀時が恐る恐る声をかける。

「はははっ、はははっ！ー！きゃははは！ー！」

「神楽、立って」

「きゃはっ、はははは、あはは！」

神楽は銀時の言葉を理解しているのだろうか。それすらも分からない。

どうすればいいか分からずに銀時は途方に暮れている。

と、そこへ新八が駆け込んできた。まだ着いたばかりのようであり、息が荒い。

「どうしたんですか！？」

「どうしたもこうしたもねえよ…見たとおりだ…」

「見た通りって…銀さん…」

新八は、今朝神楽に会った銀時と同じように、目を見開いて絶句した。

何があったのだと銀時に尋ねるが、彼はどこか諦めかけているように、ただ首を横に振った。

「とりあえず、神楽を連れてかなきゃならねえ…手伝ってくれ」

男2人がかりで神楽をかかえ起こし、両脇を支えるようにして2人は会場を出ていこうとする。遠巻きにその様子を眺める人々は、その背中を見送りながら、またひそひそと話し始めた。

ある人は神楽に同情し、ある人は馬鹿にして、ただ互いに話をしていた。銀時と新八はそれが聞こえないふりをして、場を後にした。

神楽を受付近くのソファに座らせると、彼女はやがて落ち着き、寝息を立て始めた。

「…はあ」

銀時は張り詰めていた息を吐きだした。

「銀さん、一体…」

「俺にもよく分からねえ。ただ、神楽の心が、疲れ切っちゃってんだ。だから、こんな風に……」

「そんな……」

新八は、すぐるような目で銀時を見たが、彼はうつむくばかりだ。

「これじゃあ、葬式には出してやれねえ……可哀相だが、ここで待つしか」

「けれど、沖田さんと最後にお別れを」

「今の状態の神楽を見たんじゃ、総悟君も成仏できないだろうよ……。それに、神楽にまた負担をかけちまうかもしれないねえ」

「……」

「新八、土方に欠席させてもらえるよう、連絡してくれ。な？」

銀時が、神楽を見つめながら言った。

「はい……」

新八は、肩を落として歩いて行った。

S c e n e 8 . A n o t h i n g n e s s a n d a f u n e r a l

えと、この神楽みたいな状態のことって、なんて言うんでしたっけ？
統合性失調症？精神分裂病？

・・・だれか詳しい方、教えてください

えっと・・・

本編に入る前に、読者の皆様へ。

ここのところ、テストとか進学とか順位とか、いろいろ大変なことが出てきまして、受験生だし小説どころじゃないなーって思っていました。それに、どうせ文章力もないんだし、なんて諦めておりました。

それで、小説を書くのをほとんどさっぱりやめちゃっていたんですが、この前たまたまマイページを見たら、皆様から温かいコメントがたまっていて、「やっぱり書かなきゃな」って思いました。

感想をくれた皆様、そして読んでくださる皆様、すべての方に、この場を借りて感謝いたします。

これからも、朝露詩奈をよろしく願います!!!!

Scene 9・The tear and a magic spell

結局、葬式は欠席することとなった。

「仕方ねエよな」

昏々と眠っている神楽を見ながら、銀時は誰にともなくぼそりと言った。

「はい…そうですね…」

新八の声も、重く沈んでいる。

銀時は原付を土方に預け、神楽を起こして原付に乗せるわけにはいかないからと、タクシーを呼んで万事屋に帰ることにした。

「お宅、どちらまで？」

気のよさそうな運転手は、にこにことはほ笑みながら銀時に訊く。

「ああ…ここの道まっすぐ行くと万屋銀ちゃんつつー店があるんで、そこまでよろしく」

感情のこもっていない、棒読み口調で銀時は返した。

「はい、分かりました」

銀時は運転手を一瞥し、それから薄暗い車内を虚ろな目で見た。

「あの、お宅…」

運転手が何か話しかけようとしたが、銀時の雰囲気を感じたのだろつ、黙ってアクセルを踏み込んだ。

新八は、銀時の肩をたたく。

「…銀さん、駄目ですよ。銀さんまでそんな風じゃ…これから僕たち、どうすればいいんですか」

「知らねえよ」

投げやりな銀時の口調に、新八も不安を目によぎらせる。

「銀さん……」

「知らねえって」

「でも、銀さん……」

「知らねえって言うてるだろ……!!」

銀時は声を荒げ、それから神楽の髪を撫でた。ぱさついた髪は、彼の手に絡まり、何本か抜け落ちる。簡単に抜けてしまうその髪の毛1本1本が、まるで神楽の心のように、銀時は眼を伏せた。

「何でだろうなア……こいつ、小さいころから淋しい思いをしてきて、今度は大好きな旦那が亡くなっちまうときた。考えてもみるよ、新八。……まだ18歳の背中が、そんなの受け止められると思うか？」

さつきとは違い、憂いを含んだ口調だった。

「……それは……」

「どうしてやればいいのか、分からねエ。いつまでこの状態が続くのかも、この状態がいつか良くなるのかも、何もかも全部分からねエ。でもな…精神科医には連れて行けねエ…」

銀時の目から、悲しみとやるせなさが零れ落ち、頬を伝った。

「……………!!!!」

新八は、びっくりして銀時を見る。

「俺……………」

銀時は、目をこすった。

「…俺が泣いたのは、何年ぶりだろうな…涙ってどんなときに流れるものなのか、それすらも忘れちま

「ったと思ってたのに」

「……」

新八は、そんな彼を見ていられずに、運転席に目をやった。

運転席からは、物音ひとつしない。運転手すら、車内の空気に耐えられず、気配を消してしまっているようだ。

「新八…神楽は、統合失調症じゃねエかなって…思う」

「…とう…」…何ですか？」

「統合失調症。……攘夷戦争の時の仲間にもいたんだ…いつ終わるともしれない戦い、命の危機、山積

みの死体、そういうものを見ているうちに心が壊されて、ある者は今の神楽のように虚無的な笑いを洩らし、ある者は幻覚や幻聴、被害妄想に取り憑かれ……そういう奴はみんな、死んでいった」

——そういう奴はみんな、死んでいった……。

新八の胸の中に、ますます不安の黒雲が広がっていく。

それを肌で感じ取ったのか、銀時はあわてて付け加えた。

「でも、でもそいつらは、戦場で食料も何もない状況だったから……剣に迷いがあれば死ぬような状況だったから……。神楽は、そんなんじゃないエ。俺も、新八も、妙も、真選組の連中も、みんないる。だから大丈夫だ、絶対に、大丈夫だ……」

彼は、新八にというよりは、自分に言い聞かせるように「大丈夫」と繰り返した。

——大丈夫大丈夫、大丈夫大丈夫。

その言葉が、念仏か何かの呪文のように、2人の心の波を静めていった。

「いや、あるいは、静められてなどいなかったのかもしれない。ただ、大丈夫だと信じたかった、それだけだ。」

「さあ、万事屋に着いたら妙に頼んで、神楽の身の回りの世話をしてもらわねエとな。みんなで見守っていけば、何とかなるだろうよ」

銀時は、無理に明るく言った。

「何とかかりますよね」

新八も、無理に明るく言った。

《明日には、強い北風もやみ、少し気温が上がるでしょう》

ラジオのアナウンサーが、言った。

だが――状況は好転しないまま、1か月余りが経った。
季節は本格的に、冬……だった。

S c e n e 9 ・ T h e t e a r a n d a m a g i c s p e l l (後

えっと、これからも続き書けるかどうか分からないのですが、どうか意志の弱いこの作者のために、（ものすごい暇な人だけでいいので）感想をお願いします。

感想くださったら、第一志望に合格できる気がします。（↑何で？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9729q/>

蒼い空の果てに《銀魂・沖神》 挿絵つき

2011年10月2日11時24分発行